

『古今集遠鏡』における一人称代名詞

一 はじめに

塩澤 和子

本居宣長の『古今集遠鏡』（以下『遠鏡』と略す）は江戸期を代表する国学者の俗語訳として著名であり、近世口語資料の一つとして高く評価されているものである。

『遠鏡』が成立する背景には、宣長が「はし」で述べるように、尾張藩の名家横井十郎左衛門（千秋）からの要請があったことは広く知られている。岩田隆（一九八八）によると、宣長が千秋と初めて対面したのが寛政元年三月頃であり、宣長の千秋宛書簡から推すと、寛政四年十月三十日の時点では『遠鏡』の「執筆に着手していることが判明する」という。そして『遠鏡』の稿本は「寛政五年十月（恐らくは九月下旬）」には確実に成稿していた」と見ている。これから判断すれば宣長は千秋と対面してから三年半余経ってから『遠鏡』の執筆にかかり、それから約一年半余で稿本を完成させたことになる。

執筆に着手したとされる寛政四年（一七九二）十月は、宣長六十二歳（享保十五年一七三〇生）の年で、第四回目の古今集の講義を開始した年でもある。講義は二年半に及ぶ長丁場で、終了は寛政七年五月二十六日、宣長六十五歳の時である。宣長は生涯にわたって四回古今集の全講を行っている。

第一回 明和七年（1770）一月二十六日～明和八年十月八日
 第二回 安永三年（1774）一月二十四日～安永四年十月十四日
 第三回 安永九年（1780）二月十日～天明四年（1784）閏一月十日
 第四回 寛政四年（1792）十月八日～寛政七年（1795）五月二十六日
 四回目は、三回目の開始（五十歳）から十二年後に開かれ、これが最後の講義となった。俗語訳は講義の開始と前後して着手されたのであろうが、講義完了より一年半も前に成稿していたことになる。この成稿は早速千秋に贈られたようで、寛政五年十一月十一日の千秋宛書簡には「先便古今集譯ノ書さし上申候處、御落手被成下、思召二も相叶申候御趣、御細書御丁寧之御儀、私も大慶奉存候。略一古今集遠鏡愈御藏板被仰付、早速御彫刻可被成旨被仰下、殊更記傳之通り上彫二可被仰付由、別而大慶仕候」という記述が見え、俗語訳が千秋の意に叶ったばかりでなく、早速刊刻の動きのあったことがわかる。

この俗語訳の価値について、竹岡正夫（1976）は、「科学的解釈学にもとづく優れた成果をあげているもの」として、契沖の帰納的考証的研究、富士谷成章の『換玉帖』等に見る伝統に根ざした表現学的解釈学とともに「本居宣長の解釈学の結果を示す『古今集遠鏡』の厳密なる口語訳」を挙げている。このような高い評価が出てくるのは、宣長にとって古今集が「十七八なりしほどより『歌よまほしく思ふ心いできて』（『玉勝間』巻二）おのが物まなびの有しよう」和歌に志して以来——略——最も尊重さるべき、そして愛好した歌集であった「ことにも関係しようが、そればかりでなく、生涯にわたって四回も古今集の全講を行っていることも無縁ではあるまい。四回も行ったのは「宣長自身、自分の古今集研究の成果を伝えたいという気持も、強く働いていたに違いない」であろうが、その成果をまた初学者の確実な理解のために俗語訳でもって伝えようとしたものと思われる。

さて『遠鏡』の口語資料の価値であるが、この資料に注目した研究者の一人に中村幸彦（1971）がいる。中村幸彦は、「現在までは、近世語の資料は、これを専ら文学作品にあふいで来た」が、「近世語の研究も、中

古・中世同様、近世言語生活を全般に把握すべく文学作品以外の資料に手を延ばすべき時期に「来ているのではないかと述べ、該当する資料の「第一に既に若干注目され出したもので、日本の雅語、雅文の俗語解・俗語訳を掲」ている。そして「日本の古典には本居宣長の『古今集遠鏡』（寛政九年刊）の如き面白い俗語訳があるが」と紹介する。

この中村幸彦が取り上げてから約十年後、林巨樹（1980）は『遠鏡』の助動詞研究の中で、その口語的価値を次のように捉えている。少し長くなるが、次に引用する。

現代風^註に言えば、口語訳によって古典に接近することを目的とした啓蒙書である。

いままでもなく、しかし、それは、何らかの目的で伝達の機能を果たさんがために口語文を綴るのではない以上、純粹の口語でなく、原歌からの訳文という制約をもつ。原歌を捉え対象化し、それにふさわしい口語を本居宣長の中で構成しなおすという一種のフィルター（濾過過程）のかかったものであるかぎり、真に生きた口語の姿とは言いがたい。しかし、そうした限界を考慮に容れつつ、なおそれは、江戸中期、明和・安永期の口語資料としての価値をもっているのである。――略――

いま、『遠鏡』が上方語の範疇に属すると仮定しても、それは元禄期の上方語と化政期の江戸語確立の間の欠をうずめるものとして、そして後期江戸語を経て近代語へ向かう過程での、口語資料の典型としての価値を担うものであるといえよう。

林巨樹によれば、『遠鏡』の口語は、「原歌からの訳文」である以上、「真に生きた口語の姿」を伝えているとはいえないが、そうした限界はあるとしても、江戸中期、明和・安永期の口語の資料としての価値がある。しかもその口語は、元禄期の上方語と化政期の江戸語の間の欠落部分を補うものとして、価値があるという。

本稿では、以上の点を考慮しながら、江戸中期の口語資料としての価値を考察する一環として、人称代名詞を取り上げることとする。既に拙稿^註で、敬讓の助動詞（サ）セラルル・（ラ）ルル・（サツ）シャルの使用差を考察したが、今回は、人称代名詞の種類が豊富な江戸期にあつて宣長はどのような種類の人称代名詞を選出し、訳し

分けたのか、その点を考察の中心に据えて、実態を考察したいと考える。なお、紙幅の関係から一人称代名詞だけ取り上げることにする。

二 俗語訳の基本方針

『遠鏡』の全体の構成や俗言の採用基準については、既に拙稿で取り上げたので詳述は避けるが、『遠鏡』の「はし」に本稿での考察に関わる記述があるので、その点に触れながら一人称代名詞に関する俗語意識を確認しておく。

「はし」は『遠鏡』を上梓する理由、俗語採用の基本姿勢、俗語観、訳出法について開陳した部分であるが、その中で採用する資格がある俗言として「京わたりの詞」「うちとけたる詞」「をうなの詞」を挙げ、さらに「かたこと」も使用すべきであるとする。「かたこと」の具体例として列挙する中に人称代名詞がある。「たとへばおのがことを、うるはしくはわたくしといふを、はぶきてつねに、ワタシともワシともいひ、ワシハといふべきを、ワシヤ、それはをソレヤ、すればをスレヤといふたぐひ 一略 ことにうちとけたることなるを、これはたいきほひにしたがひては、中々にうるはしくいふよりは、ちかくあたりて聞ゆるふしおほければなり」と述べている。人称代名詞に関する記述はこれだけで、例として「わたくし、ワタシ、ワシ、ワシヤ」の四種類を挙げているのであるが、ここには助詞・助動詞のような雅語と俗語との対応関係は認められない。

助詞・助動詞の訳出法に関しては、例えば「てにを註はの事、ぞもじは、譯すべき詞なし、一略 今ハサといふ辞を添へて、ぞにあて、花ガサ昔ノ云々と譯す、ぞもじの例、みな然り」などと詳しく解説し、「はし」の記述の中心を占めている。永野賢（1975）によれば、「てにを註は」を調査した結果、「概していえば、『第二原則』（筆者注、同形式の雅語は同じ俗語で訳す方法）がより多く適用されているものがほとんどである」と述べ、「宣長は、私のいわゆる『第二原則』によって雅語と俗語との対応についての俗語文法意識を確立したとい

えよう」と評価する。ただし「同時にまた、『第一原則』（筆者注、一つ一つの歌の心を生かす俗訳法）を振りす
 てることができなかつたところに、宣長の宣長たるゆえんがあると思う」とも評する。永野は「第一原則」を「大
 前提」、「第二原則」を「一般法則」と、次元の異なるものと捉え、「和歌は文学であり、これを俗語訳すること
 は、単なる語学的作業でないこと、当然である」と主張するが、俗語訳を考察する際、銘記すべきことであろう。
 とところで既に確認したように代名詞に関しては、永野の「第二原則」を立てる手がかりはない。同形式の雅語
 に対し同じ俗語で訳しているか否かは、実態を調査しなければわからないが、和歌には必ずしも一人称代名詞が
 出現するとは限らないし、たとえ出現しても「われ」と「わが（身）」に限定されているため、雅語と俗語との
 対応関係を見ることの意味が助詞、助動詞ほど重要ではないと思われる。むしろ人称代名詞については、『遠鏡』
 全体の調査を実施し、種類、頻度、出現傾向を把握し、作者や和歌の内容との関係について検討することの方が
 宣長の俗語観、『遠鏡』の口語資料としての価値を考察する上では重要であると考ええる。そこで以下、『遠鏡』全
 体の実態調査から検討を進めていくことにする。調査の対象として使用する資料は次のものである。

「古今集遠鏡」（六巻）『増補 本居宣長全集 第七』 昭和二年一月十日 増訂再版発行 吉川弘文館

調査対象は、「はし」「仮名序」「巻第一」から「巻第二十」までの全冊である。巻第一から巻第二十までに出現
 する和歌の俗語訳には、原歌を俗語訳した部分と原歌にはない言葉を補って歌の心が理解できるよう配慮した部
 分（傍線部分）がある。また稀に詞書のある一部の記述に対し俗語訳でルビを施すこともある。例えば978の
 詞書には次のように、「おのが思ひは」にルビがついている。ルビは（ ）で示した部分である。

むねをかのおほよりがこしの國よりまうできたりける時に雪のふりけるを見ておのが思ひは（ワシガ皆様ヲ
 オナツカシウ思フ思ヒハ）この雪のごとくなむつもれるといひけるをりによめる

978 君が思ひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじとおもへば

本稿では、和歌の俗語訳、詞書に散見する俗語訳などすべてを調査の対象とした。

三 一人称代名詞の種類・頻度・出現傾向

種類と頻度を一覧表にすると「表1」のようである。表について説明しておく。表に示す数値は、俗語訳に出現する同一形式の述べ語数である。また一人称代名詞のワシとワシガ（ワシに連体格の格助詞ガの付いたもの、「ワシガ身」など「ワシガ」と表記）、ワレ（「我・吾」と表記してあるが、すべて片仮名で表記する）とワガ（「連体詞」「我心」「我が袖」「吾君」など「我・我が・吾ガ」の表記もあるが、すべて片仮名表記とする）、ワタシとワタシガ（「ワタシガ心」など）、ワレラ（「我ラハ」の表記もあるが、すべて片仮名とする）とワレラガ（「我ラガ事」と表記してあるが、片仮名とする）のうち、前三者はそれぞれ別個に出現頻度を示してあるが、述べ語数はいずれも二語の合計として表示してある。なおワレには、我々ドモ（仮名序11回）を含めてある。ワシヤは、ワタシハの融合形、オレヤは、オレハの融合形であるが、「はし」では「ことにうちとけたること」と特記してあるため、別個に扱った。また「拙者」は複数形「拙者ドモ」を、「此方（此ノ方）」も複数形「此方ドモ」を含めてある。また「私」は、ワタクシ、ワタシと二通りの読みが可能だが、ここではワタクシに含めておいた。ちなみに「私」は、巻第一、巻第十、巻第十六に各1回計3回出現する。

「表1」を見ると、一人称代名詞は一六種類確認できる。頻度の高い順に列挙すると、「ワシ、オレ、コチ、ワレ、ワタシ、ワシヤ、拙者、ワレラ、ワタクシ、此方、拙僧、自分、身、オレヤ、朕、手前」まで数えることが出来る。江戸期の一人称代名詞は約四〇種類注14ぐらい存在するため、単純に計算すれば、この一六種類はそのう

ちの約四割に相当する。もっともこの四〇種類の中には、方言や限られた社会の者しか使わない代名詞も含めてあるので、田中章夫の近世前期上方語を参照すると、そこには一五種類が挙がっている。

1 最も敬意の高い場合の言い方

(一) 人称代名詞 自称 ワタクシ・ワタシ(男)・拙者(町)・ワレラ(男)

2 普通の敬語表現にみられる言い方

(一) 人称代名詞 自称 ワタシ(女)・オレ・ミ(武)・ミドモ(武)・ワレラ(女)・ワレワレ(武)・コチ・コチト(女)・セツシャ(武)・ソレガシ(武)

3 ごく軽い敬意のある場合の言い方

(一) 人称代名詞 自称 ワシ・オレ・ミ(武)・ワレ(武)・ワ(武)

ここには、『遠鏡』にはない2のミドモ(武)・コチト(女)・ソレガシ(武)と3のワ(武)など、主に武士階級の自称が含まれる一方で、『遠鏡』にあるワシヤ・此方・自分・オレヤ・朕・手前などは出ていないが、『遠鏡』の人称代名詞は、1「最も敬意の高い」から3「ごく軽い敬意」までのすべての言い方に該当する、ほぼ全容を覆っていることが確認される。

次に頻度を見ると、『遠鏡』には高頻度のワシ \parallel 243(44%)を始めとして、頻度1、2の「身、オレヤ、朕、手前」まで含んでおり、上下間の頻度差には著しいものがある。特に注意されるのは、一位から二位、二位から三位と順位が下がるに従い、頻度が半減していく点である。そのため一位のワシと二位のオレだけで、364(66%)にも達しており、それに三位のコチと四位のワレまで含めると、460(84%)にも達するのである。つまりわずか4語で8割以上を占める結果なのであるから、種類が多い割には実質的に機能している語が如何に少ないかがわかる。

次に、巻ごとの出現傾向を見ると、一位のワシは、特に巻第十一から巻第十五の「恋歌」の部に集中的に出現する傾向を示し、この「恋歌」だけでワシ全体の174(72%)にも達している。その他、比較的多く出現する

羈旅	物名	恋一	恋二	恋三	恋四	恋五	哀傷	雑上	雑下	雑躰	大歌	延べ語数 (%)
九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	
1	1	17	20	13	21	32	1	4	8	13	4	243 (44)
	2	21	13	11	14	12	1	3	6	4		
1	3	5	5	3	6	8	4	18	7	16	2	121 (22)
1	3	4			2	5		1		5	2	52 (9)
		1			2	2	1	1	1	2		44 (8)
				1		7	3	1	9	2	2	
					1	4	3		4			23 (4)
			1		4		2					
		3		4	7		1	1		1		22 (4)
	1							3	1			15 (3)
								1			1	6 (1)
	1						1		1			6 (1)
1									2			5
							1		1			4
					1		1					3
									2			2
						1						1
												1
												1
4	11	51	39	32	58	71	19	33	42	43	11	549

〔表1〕

順位	古今集 一人称	は し	仮 名 序	春上	春下	夏歌	秋上	秋下	冬歌	賀歌	離別
				一	二	三	四	五	六	七	八
1	ワシ	2	1	3	2	4	2				6
	ワシガ										1
2	オレ		2	5	9	8	16	3			
3	コチ			1	8	5	7	2	5	1	
4	ワレ／－ドモ		1								
	ワガ		1	2					1	2	2
5	ワタシ	1								1	2
	ワタシガ										
6	ワシヤ	1				1					3
7	拙者／－ドモ		1				1				8
8	ワレラ／ワレラガ		1							3	
9	ワタクシ／私	1		2							
10	此方／－ドモ										2
11	拙僧										2
12	自分				1						
13	身										
14	オレヤ										
14	朕									1	
14	手前					1					
延 べ 語 数		5	7	13	20	19	26	5	6	8	26

のは、卷第十八（雑歌下）≡14、卷第十九（雑体）≡17であるが、後は頻度も低くなり、頻度7から1、2という巻まであり、中には1回も出現しない巻もある。ワシは巻による格差が著しく、「恋歌」との関係が特に注意される一人称代名詞といえる。

二位のオレは、「恋歌」にも5、6回平均で出現するが、相対的に頻度が高いのは、卷第四（秋歌上）、卷第十七（雑歌上）、卷第十九（雑体）であり、しかもこの三つの巻では、出現する代名詞の中で最もオレの頻度が高い。ただ、オレの場合、頻度1、2回や1回も出現しない巻もあるが、ワシに見るような巻間の格差はあまり著しくなく、平均6、7回の頻度で巻全体に渡り出現している。

三位のコチになると、1回も出現しない巻、1、2回の巻も増加するし、最高は7、8回止まりでしかないが、特定の巻に偏ることなくほぼ平均4、5回の頻度で出現する。出現傾向にはあまり特色が見られない。

それに対し、四位のワレ、五位のワタシ、六位のワシヤ、七位の「拙者」になると、出現範囲は狭くなり、偏りが出てくる。ワレやワタシは卷第十四以降に比較的集中する傾向を示し、ワシヤは「恋歌」の部に比較的多く現われる。「拙者」は、特に卷第八に集中するのが注意される。

このように出現傾向を見ると、頻度の高い一人称代名詞の多くは、巻の性格と深く関わっていることが推測される。恋歌に集中するワシ、秋歌・雑歌・雑体に比較的多いオレ、恋歌・哀傷歌・雑歌などに出現しやすいワレ、ワタシ、恋歌に出現しやすいワシヤ、そして離別歌に集中しやすい「拙者」などである。これは、『遠鏡』における一人称代名詞の待遇価値を検討する上で、参考になる結果といえよう。

以上、統計の結果、一人称代名詞の種類、頻度、出現傾向を確認することができた。そこで次に、以上の結果を参考に、個別の代名詞の検討に入る。その前に次の点を確認しておきたい。人称代名詞について時枝誠記は「（その）特質は、話手との関係概念を表現するところにある」と述べているが、話し手がどの種の人称代名詞を使うかは、実際の会話の場面、聞き手との関係、話題をどのようなものかと捉え、それらを自分とどのように関係付けるかによって決まってくる。ところが『遠鏡』に出現する人称代名詞は、先述の林巨樹が指摘するように、訳文

としての性格上、実際の場面における話し手との関係概念の表現とはなっていない。あくまでも宣長の目を通して認識され解釈された結果、選出された人称代名詞でしかない。従って以降の考察では、宣長が和歌の作者をどのように捉え、和歌の内容をどのように解釈したのか、その点を考慮に容れながら実態を考察していくことが望ましいと考える。そのためには一首ごとの和歌の検討が必要となる。ただし現段階では549語すべてにわたる検討が完了していない。そこでとりあえず「はし」の記述を参考に、そこで取り上げてある四種類の一人称代名詞に限って検討し、その結果を報告することにする。

四 一人称代名詞と作者との関係

繰り返しになるが、「はし」で例示する四種類の語の頻度を挙げると、ワシ \parallel 243、ワタシ \parallel 23、ワシヤ \parallel 22、ワタクシ（私） \parallel 6である。まずこの四種類を作者の性差との関係で捉えてみることにする。周知のようにならぬ古今集の作者は、作者名明記の「男性歌人」「女性歌人」と「よみ人しらず」（記載のないものも含む）に分けることができる。ただし「よみ人しらず」の中にも、詞書などで作者名が判明するもの、性差だけでも判明するものがある。そこで作者との関係を考察するにあたり、まず作者を、性差判明の有無を基準に「性差判明」（以下「判明」と略す）、「性差不明」（同「不明」）に二大別することにした。さらに前者は下位項目として「男性」「女性」を立て、更にその各々の下位項目に「作者名記名」（同「記名」）、「作者名無記名」（同「無記」）を立てた。「無記」には、たとえ「よみ人しらず」でも詞書などで性差の判定が可能なもの、あるいは「返し」などで相手から性差の判定のできるものなどを含めた。以上は和歌の俗語訳を対象としたものだが、先述のように調査対象に「詞書」「仮名序」なども含めたため、それらの数値は参考として「その他」を立て、一括した。結果は〔表2〕の通りである。

〔表2〕

一人称 作者	性 差 判 明				性差不明	その他	合 計
	男 性		女 性				
	記名	無記	記名	無記			
ワシ	48	1	14	7	82	3	155
	49		21				
	70						
ワシガ	25	1	17	1	44		88
	26		18				
	44						
ワシヤ	1		4	2	14	1	22
	1		6				
ワタシ	3		6	6		1	16
			12				
	15						
ワタシガ	2		4	1			7
			5				
	7						
ワタクシ	1		1			1	3
私	2	1					3
合 計	82	3	46	17	140	6	294

表を見ると、性差の明不明を基準とする分類で明らかかな差違が出てくるのがわかる。まずワシ（ワシガ）、ワシヤの二語は、「判明」「不明」のいずれにも出現するが、ワタクシ、ワタクシ、「私」は、「判明」の方だけに出現し、性差の判定ができない歌には1回も出現していないのである。

個別に見ると、ワシは「判明」対「不明」が〔70対82〕、ワシガは〔44対44〕であり、ワシの方は幾分「不明」の頻度が高いとしても、「判明」と「不明」の勢力はほぼ伯仲しているといえる。また「判明」の方では「男性」対「女性」がワシ〔49対21〕、ワシガ〔26対18〕で、男性の方が数値が高い。これは恐らく古今集の歌人が相対的に男性の方が多いことにも関係すると思われるが、いずれにしても男女ともに用いる点から見て、作者名の有無に関わらず用いられる、男女共有語的性格の人称代名詞と言えるかと思う。

ワシヤは「判明」対「不明」が〔7対14〕で、「不明」の方が倍の数値を示している。また「判明」の方では「男性」対「女性」が〔1対6〕と女性の方が高い。ワシヤは、名前、身分、階級すら特定できないような歌人での使用が多いが、男性より女性歌人に多く用いている点から見ると、女性語的性格の強い人称代名詞であることが推測される。

ワタクシ・ワタクシガは、いずれも「判明」の方だけに出現する。「男性」対「女性」ではワタクシ〔3対12〕、ワタクシガ〔2対5〕と、女性の方の数値が高い。女性には「記名」「無記」いずれにも出現するが、男性の方はすべて「記名」のみである。ワタクシは、男女が共有しているとは言え、女性語的性格が強いようである。

ワタクシ、「私」も「判明」の方だけに出現する。「男性」対「女性」は、ワタクシ〔1対1〕、「私」〔3対0〕で、ワタクシは男女共有語と見られるが、「私」と表記する場合は男性専用語となっている。

それでは以上の結果をもとに、作者名が明らかかな歌に焦点を当て、どの作者にどの種類の人称代名詞を当てているのか、代名詞の選択には作者の身分、相手との対人関係などが関与してくるのか、同一作者にはいずれも同一形式の人称代名詞を当てるのか、それとも歌の内容や相手との関係によって訳し分けられているのか、などを検討していくことにする。そしてそれらの検討を通して、各語の待遇価値を探ってみたい。

〔表3・1〕

表3・1	男 性	ワシヤ	ワシ	ワシガ	ワタシ	ワタクシ	私	合計
1	在原 業平		7	4	1			12
2	紀 貫之		3	4	1			8
3	凡河内躬恒		3	3				6
4	在原 元方		4	1				5
5	壬生 忠岑		4	1				5
6	紀 友則		3	2				5
7	清原深養父		3	1				4
8	宗岳 大頼		3	1				4
9	河原左大臣	1	1	1				3
10	源 宗子		3					3
11	素性 法師		2		1			3
12	兼芸 法師		2					2
13	小野 貞樹		1	1				2
14	藤原 興風		1	1				2
15	文屋 康秀						2	2
16	兼 覧 王		1					1
17	坂上 是則		1					1
18	下野 雄宗		1					1
19	平 中興		1					1
20	平 元規		1					1
21	橘 清樹		1					1
22	藤原 忠行		1					1
23	布留 今道		1					1
24	在原 行平			1				1
25	大江 千里			1				1
26	小野 良材			1				1
27	平 貞文			1				1
28	藤原 勝臣			1				1
29	貞朝 臣登				1			1
30	小野 春風				1			1
31	藤原 良房					1		1
	合 計	1	48	25	5	1	2	82

五 ワシ・ワシヤ・ワタシ・ワタクシと和歌との関係

作者名の明らかな男性・女性歌人と一人称代名詞を整理すると、〔表3・1〕〔表3・2〕のようになる。なお、参考までに作者不詳の歌に出現する数値（〔表2〕より引用）を〔表3・3〕に挙げておく。

〔表3・2〕

表3・2	女性	ワシヤ	ワシ	ワシガ	ワタシ	ワタクシ	私	合計
1	伊勢	2	2	8	1	1		14
2	小野 小町		3	3	1			7
3	藤原 因香		1		3			4
4	くそ	1	1	2				4
5	閑院		1	1	1			3
6	寵 メグミ	1	1	1				3
7	藤原 兵衛		1		1			2
8	三国町		2					2
9	陸奥		1	1				2
10	閑院五みこ				2			2
11	二條		1					1
12	紀乳母			1				1
13	小野小町姉				1			1
	合計	4	14	17	10	1	0	46

〔表3・3〕

表3・3	作者名不詳	ワシヤ	ワシ	ワシガ	ワタシ	ワタクシ	私	合計
1	男性		1	1			1	3
2	女性	2	7	1	7			17
3	性差不明	14	82	44				140
	合計	16	90	46	7	0	1	160

該当する男性歌人は31名、女性歌人は13名を数えることができる。表を見ると、男女とも必ずしも一種類だけの一人称代名詞を当てているわけではなく、中に二種類又はそれ以上を併用させている歌人もある。ただ男性の方が女性より併用例は少なく、31名中25名にはワシだけを当てている。またワタクシだけは貞朝臣登、小野春風の2名、ワタクシだけは藤原良房の1名、「私」だけは文屋康秀の1名である。併用は、ワシとワシヤが河原左大

臣の1名、ワシとワタシが在原業平、紀貫之、素性法師の3名である。

対する女性の方は、ワシだけは、三国町、二条、陸奥、紀乳母の4名、ワタシだけは小野小町姉、閑院五のみこの2名で、残り7名は併用である。2語の併用は、ワシとワシヤが「くそ」と寵の2名、ワシとワタシが藤原兵衛、小野小町、閑院、藤原因香朝臣の4名、4語の併用は、伊勢の1名である。

以上のように、作者名を手がかりに人称代名詞を見ると、宣長は必ずしも同一の歌人に同形式の代名詞を当てていたわけではなく、歌人によっては2語又は4語を併用させ、訳し分けている実態が確認される。この結果は、恐らく宣長は俗語訳の際、作者の身分、対人関係、歌の内容(巻の性格も含め)などを勘案して、適切な一人称代名詞を選出したことを推測させる。そこで少し具体的に男性歌人、女性歌人ごとに、作者の身分、対人関係、和歌の内容を検討しながら、各語の訳し分けの実態を探ってみることにする。

五― 男性歌人

1 ワシヤ

男性で唯一ワシヤが出現するのは、河原左大臣である。左大臣の歌は古今集に二首採録されており、724はワシのみ、873(例1)にはワシとワシヤが共存する。なお原文にある傍線部(二筋を引たるは、歌にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり」とある部分)は、例文では省いた。詞書に散見するルビ(俗語訳の部分)は原文の該当する記述の下に()で示す。

例1 五節のあした(アクルアサ)にかむざしの玉のおちたりけるを見てたがならむと、ふらひて(ヌシラタツ

ネテ)よめる

河原ノ左のおほいまうちぎみ

873 ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

○此玉ノ主ハタレヂヤトトヘドモ 皆ワシヤシラヌ</ト云テ タレモワシガノヂヤト云モノモナシ 誰レ

ガノヂヤト云モノモナイニ ソンナラユフベノ舞姫ヲバ誰レト云コトナシニ惣々ヲア、ハレイトシヤト思
ウテヤロカイ 上句又主シハ誰レヂヤト玉ニトヘドモイハヌニ

例1 (873) は「雑歌上」に分類される、若い娘たちに戯れるような内容で、「男子の無遠慮であからさまな要求に相手の女性たちが困惑して答えられなくなった」という歌(竹岡・下660頁)と評されている。ワシヤの出現するのは「此玉ノ主ハタレヂヤ」と問われた舞姫達が皆「ワシヤシラヌ」と返答する会話の部分であり、ワシヤは舞姫達の自称として使われている。宣長は、おそらくふざけた歌に登場する舞姫達であるので、彼女らの自称にワシヤを当て「ことにうちとけたる」感じを出そうとしたのであろう。いずれにせよ、左大臣の歌に出現するワシヤは、男性でなく女性の自称であることが確認されるため、俗語訳には男性の自称の例は一つも存在しないことが明らかとなった。ワシヤは女性専用語といえる。

ちなみに724は、「みちのくのしのぶもぢずり誰ゆえに」と、心乱れる恋の心情を詠ったもので、「恋歌」に分類されるが、ここには「心ヲチラスワシヂヤナイゾエ」とワシが現れる。

2 ワタシ

ワタシが出現するのは、在原業平(705 例2)、紀貫之(589 例3)、素性法師(356 例4)(以上3名はワシと併用)、貞朝臣登(769 例5)、小野春風(963 例6)(以上2名は単独)の5名である。

例2 藤原ノ敏行ノ朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひしりてふみつかはせりけるをことばにいま、う
でく雨のふりけるをなむ見わづらひ侍る(オツ、ケ參候ガアメフリ候ヲデカケニク、候ユエシバシ見合セ
居申候)といへりけるをき、て女にかはりてよめりける
在原ノ業平ノ朝臣

705 かずく／＼に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

例 3 ○ワタシガコトヲシンセツニ思召テ下サルヤラサウモナイヤラ ソコノホドハドウモ キ、タゞシガタサニ
 コヨヒノ雨デソレヲ考ヘテ見テ ソレデワシガ身ノ仕合セ不仕合セモシレルヂヤガ ソノ雨ハサ此ヤウ
 ニ 段々ト大ブリニナリマス コレデハワシガ不仕合セモシレタヂヤワイナ 此雨デワシガ身ノ仕合不仕
 合ヲ知ルト申スワケハ マアタゞ今ノ御文ノ通ナレバ 此雨が止ンダナラ 御出ガアラウシヤツハリフツ
 タラ 御出ハアマイヂヤ スレヤ此雨ハワシガ身ノ仕合不仕合ノシレル雨ヂヤウサテ
 やよひばかりに(ジブンニ)ものゝたうびける(イヒケル)人のもとに又人(又外ノ人ガ)まかりてせう
 そこすとき、てよみてつかはしける

589 露ならぬ心を花におきそめて風ふくごとにものおもひぞつく

○花ニハ露ガオクモノヂヤガ ソノ露デハナイワタシガ心ヲ オマヘノ花ニオキノメテキルユエニ 風ノフ
 クタビニ 花ガヨソヘチラウカト ソコヘ心ガツイテサ 思ヒコトガゴザル ドウカヨソヘチリサウナウ
 ハサモチラトウケタマハツタゾエ

例 4 よしみねのつねなりがよそぢの賀にむすめにかはりてよみ侍ける せせいほうし

356 萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の陰にすまむと思へば

例 5 ○君ハ萬代ノ御壽命ヲ侍ツナレバ ソノマツト云名ノ松デサオイハヒ申シマスル サウシテソノ千年モア
 ル松ノカゲニ鶴ノスムヤウニ ワタシモ君ノ千年ノオカゲヲ蒙ツテ共ニ長ウ居マセウト存ジマスレバサ
 さだのゝぼる

769 ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞおひける

○長雨ガフレバフルイ家ノ軒ハ クサツテ 忍草ガハエシゲルヤウニ タツタヒトリ物思ヒノシンキナナ
 ガメバツカリシテ月日ヲオクルワタシナレバ 人ヲ戀シノブ心ノ忍ブ草ガサシゲウナルワイ

例 6 左近ノ將監とけて侍ける(ノ官ヲメシアゲラレタル)時に女のとふらひにおこせたりける返り事によみて
 遣しける をのゝはるかぜ

963 あまびこの音づれしとぞ今は思ふ我かかと身をたどる世に

○ワタシモ御聞及ビノトホリノ仕合セデ タウワク致シテ 我身デハナイカト存ズル時節ニ カヤウニ御
訪下サルレバ 今デハモウハヤ 天人ノ御尋子下サレタヤウニサ存ジマスル サテノ御深切ナヨウコ
ソ御尋子下サレタレ あま彦とは、天上の人をいへり、物語どもに、これかれ見えたり、

例2 (705) には、ワシガは「ワシガ(身ノ)仕合不仕合」と、ほぼ同じ表現で4回繰り返されるが、ワタシは、ワタシガコトと、俗語訳の冒頭に唯一回出現するだけである。この歌は詞書に「女にかはりてよめりける」とあるように、業平が「なりひらの朝臣の家なりける女」に成り代わって藤原敏行朝臣に返す歌として詠んだものである。ちなみに業平の歌でワシだけが出現するのは、63、646、707、785の四首である。これらは、いずれも相手の女性の歌に対する「返し」であり、男性である業平の立場で詠んだものであって、ここでは男性の自称としてワシを用いている。

例3 (589) は作者名が記していないが、「貫之らしい歌である。詞書の敬語も効果的に用いられている」(岡・下187)に従い、作者は紀貫之として扱った。この歌の相手については「詞書の敬語の使い方(筆者注、「物のたうびける人」とあるところ。「のたうび」は「のたまひ」の変化。古今集の詞書には特別の場合の外は敬語を使っていない、とある)からして相手の女性は身分の高い人であることが知られる」(竹岡・下187)と評している。ちなみにワシが出現する方の貫之の歌は42、572、588、597、604、729、804と七首ある。これらの歌の相手は、「42 はつせのやどりける家のあるじ」「588 やまとに侍りける人」など具体的に説明する人物から「729 私の心を染めた人」「804 世の中の人」など不特定の人物までいるが、その中には詞書で敬語を用いるような人物が含まれていない。従って紀貫之の歌で唯一、「ワタシガ心」とワタシガが出現するのは、身分の高い女性につかわしたと推測される歌だけである。

例4 (356) の素性法師の歌は、「よしみつのつねなり」の長寿を言祝ぐ「賀歌」で、詞書に「むすめにか

はりてよみ侍ける」とあるように、業平の例2(705)と同じ、男性が女性に仮託して詠んだものである。他に素性法師の歌(555)に、出家の僧侶の立場で「つれもなき人(ワシが思フ人)」を詠んだものがあるが、ここにはワシのみが出現する。これも在原業平の場合と同様である。

例5(769)の作者、貞朝臣登については「貞朝臣登 備中守仁明御子第十五 略— 母三国町更衣」(竹岡・下482)とあり、仁明天皇の第十五番目の御子である。この歌に関し竹岡は「ふるやのつまなれば」を「古屋の軒端(つま)なれば」と「妻なれば」を掛けていると解し、「この私も、ただ一人物思いに沈むばかりで月日を過ごしている、そんな妻の境遇なので—略—」と訳している。宣長の俗語訳では「妻」を掛けて解釈しているとは読みとれないが、もし妻の立場で詠んだと解すれば、業平、素性法師と同様、女性に仮託した歌となる。宣長は、仁明天皇の御子の立場を考慮して自称にワタシを用いたのかも推測する。

例6(963)の小野春風は「正五下右少将、父母不審」(竹岡・下287)とある。歌の内容は、左近の将監の官が解かれていた時、女の見舞いに寄越した返事として「あの時の解官の知らせは、私にとって天彦の訪問して来た時、今になつては思うのさ」と詠っているものである。竹岡は「あまびこ」を「天彦(こだま)」と解し「讒言による解官をまことに的確にとらえた効果的な語である」と評している。宣長は「あまびこ」を「あまびと」と解し、「あま彦とは、天上の人をいへり」と述べ、以下山彦と解する説があるが誤りである旨、詳細に説明している。春風の歌は、他に653もあるが、ここには一人称代名詞は出現しない。ちなみに宣長が963の歌で春風の自称にワタシを当てたのは、恐らく春風が自分の罷免の知らせを「あまびこのおとづれし」と捉えたことと関係するのではないかと思う。というのは、身分からみて、春風は貞朝臣登のような御子の立場ではないし、また相手の女性は、紀貫之の歌に登場するような、詞書に敬語を用いるほどの身分でもない。この歌が他の四首と異なる点は、唯一、喩えとして「天上の人」を登場させたところにある。おそらくそれがワタシを採用した理由ではないかと考える。

以上、男性歌人の俗語訳に出現するワタシは、次のように整理できる。

(1) 女にかはりてよめる歌

在原業平・素性法師

(2) 身分ある女性によめる歌

紀貫之

(3) 御子の歌

貞朝臣登

(4) 天上の人を喩えた歌

小野春風

『遠鏡』の俗語訳では、男性歌人の場合、併用例を検討した結果から、ワシは「恋歌」などで男性の自称として広く一般に使われているが、ワタシの方は、(1) から (4) に挙げるような特殊な条件下で使われていることが確認できた。そしてまたこの結果により、「はし」で「はぶきてつねに、ワタシともワシともいひ」と並列する記述と相違することも明らかとなった。男性では「つねに」はワシを用い、ワタシは特殊な条件下での使用に限定されているのである。

3 ワタクシ／私

ワタクシが出現するのは、藤原良房(52 || 例7)、「私」は文屋康秀(8 || 例8、445 || 例9)の各1名である。

例7 染殿ノ后のおまへに花がめに桜の花をさ、せ給へるを見てよめる 前のおほきおほいまうちきみ

52 年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

○年數ヲ經マシタレバ ワタクシモイカウ年ハヨリマシタガ サリナガラ アナタノ御繁昌ナサルル此御
殿デ カヤウニ花ヲ見マスレバ ナンニモ物思ヒモゴザリマセヌ

例8 ある人のいはく さきのおほきおほいまうちきみの哥也 二條后のとう宮のみやすむ所(御母儀様)とき
こえける時(申シタ)正月三日(康秀ヲ)おまへにめしておほせごとあるあひだに日はてりながら雪の(康

秀ガ) かしらにふりか、りけるをよませ給ひける (オヨマセアソバサレタ)

ふんやのやすひで

8 春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

○此節ノ春ノ日ノ光ノヤウナ難有イ御惠ミヲ蒙リマスル私デゴザリマスレドモ 年ヨリマシテカヤウニ頭

ガ雪ニナリマスハサ難義ニ存ジマスル コマリマシタ物デゴザリマス

例9 二條ノ后春宮のみやすむ所 (御母儀) と申ける時に めどにけづり花させりけるをよませ給ひける (オヨ

マセナサレタ) ふむやのやすひで

445 花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな

○此ケヅリ花ヲ見マスレバ 花ノ咲クベキ木デモアルマイケレドモ花ガサキマシタワイ 致セバナルマジ

イ木ヘモ木實ノナルヤウニ 年ヨリマシタ私ガ此身モドウゾ立身イタス時節モアレカシト願ヒマスル儀

デゴザリマス

例7 (52) は前の太政大臣藤原良房の歌である。『大鏡』には「この殿ぞ藤氏の初めて太政大臣、摂政し給ふ。―略― 御女の染殿後の御前に桜の花の瓶に挿されたるを御覧じて、かく詠ませ給へるにこそ。」「歌、五二」、后を花にたとへ申させ給へるにこそ」(竹岡・上350頁)と記述してある。ワタクシは、藤原氏の初代の太政大臣良房の自称として、娘の染殿后(藤明子、文徳女御、清和母后)の前で后を桜の花に喩えて詠んだ歌の俗語訳に出現しているのである。

例8 (8) と例9 (445) はいずれも文屋康秀が、二条后が東宮の御息所と称していた時に後の前で詠ませられた歌で、二首とも「裏に春宮の恩恵を受けている自分であるが、すでに老境にあるわびしさを、折からの状況に託して詠んだもの」(竹岡・上253)に相当する。文屋康秀の歌は五首採録されているが、残る三首(249、250、846)には一人称代名詞は出現しない。ちなみに「表3・3」に挙げたように、「私」は、男性で「よみ人知らず」の「哀傷歌」(844例10)にも出現する。

例10 めのおやの思ひにて（妻ノ親ノ忌中デ此ヨミ人ガ）山寺に侍けるをある人のとふらひつかはせりければ返
り事によめる よみ人しらず

844 あしひきの山べに今はすみ染の衣の袖のひるときもなし

○私モモウハヤ只今ハ 御聞及ビノ通り 山二住ミハジメマシテ 泣テバカリヲリマスレバ 服ノ袖ノカ
ワキマスヒマモゴザリマセヌ

ここで「私」を使う理由は判然としないが、これが「哀傷歌」であることに関係があるのかもしれない。

ワタクシ、「私」は、例10を除く三首は、すべて後の御前で詠んだ歌に出現するもので、「はし」の「おのがこ
とを、うるはしくはわたくしといふ」という記述に対応する。

以上、男性歌人に出現する一人称代名詞を検討した結果、待遇価値は、「ワシ―ワタシ―ワタクシ・私」の順
序で、次第に敬意が高まっていることがわかる。

五―二 女性歌人

先述したように、女性歌人はワシだけが4名、ワタクシだけが2名で、あとは2語または4語を併用するのが7
名いる。そこで男性と同様、併用する歌人を中心に検討していくことにするが、伊勢の例だけは別に扱う。

1 ワシヤ

ワシヤが出現するのは、寵（376 例11）、くそ（1054 例12）、伊勢（後述）の歌と先述の河原左大臣
の歌（873 例1）に登場する舞姫の自称としてである。

例11 ひたちへまかりけるときにふぢはらのきみとしによみてつかはしける

寵

376 あさなけに見べき君とし頼まねば思ひたちぬるくさ枕なり

○毎日アハレル公利様ヂヤトハ頼マレヌ ミツクサイ御心ナレバ ソレユエワシヤ存ジ立ツテ常陸へ下リ
マスル今度ノ旅デゴザリマス

例12 くそ

1054 よそながら我身にいとよるといへばたゞいつはりにすくばかり也

○ソソナコトハワシヤ夢ニモシラス スレヤソノヤウニ ワシガイトコガ ワシニ戀ヲスルヤウニ ヨソ
ナガラ云ノハ ソレヤホンノコトデハナイヂヤ タウソソノヤウニ云バカリヂヤ ソレガモ
シホンノ コトナレヤ ワシガ方へ 何ントゾ云ヒカケサウナ物ヂヤワサテ

例11 (376) の寵の歌は、頼りにならない相手 (藤原公利) であるから、とうとう思い切つて (「思ひたつ」には「思ひ断つ」あきらめる) と「立つ」旅立つ」とが掛けられている。旅立つことにしたという心境を詠ったもので、「思ひたちぬる」に当たる俗語訳に「ソレユエワシヤ存ジ立ツテ」と、ワシヤが出現する。寵には他に二首あるが、いずれもワシ、ワシガであつて、ワシヤは用いてない。例えば640 (恋歌) の「しののめのわかれを、しみ」の歌では、「夜明けの別れを惜しく思つて」(竹岡・下264頁) 泣く心情を詠うところに「ワシガサマヅ泣キハジメタ」とワシを用いている。また742 (恋歌) の「山がつかきほにはへる」の歌では、「伝言さえ絶え、いよいよ二人の間はぷつり切れてしまった」(竹岡・下432頁) と、失恋の嘆きを詠っているが、「ワシガ方へト云テハ子カラコトツテモナイ」と、傍線部で「ワシガ方」を用いている。このようにワシとワシヤについては、ワシが「ワシガサ」「ワシガ方」の形式で夜明けの別れや失恋の嘆きを詠う歌に、ワシヤが恋人との別れをきっぱり決意した歌に出現するということが確認される。

例12 (1054) の「くそ」の歌は、「誹諧歌」に含まれるもので、「わが身にいとこの寄る」に「糸の繕る」

を掛けるなど「恋の歌をこのように徹底的に日常茶飯事からめ寄せて、一略——おどけた感じの伴うところに俳諧がある」(竹岡・下1097)と評する。この歌には「ワシヤ夢ニモシラヌ」「ワシニ恋ヲスルヤウニ」「ワシガイトコガ」「ワシガ方へ」と、ワシとワシヤが共存しているが、ワシヤは「おどけた感じ」を演出する効果を狙ったようで、先の河原左大臣の歌に通じるものがある。なお「くそ」の歌はこの一首のみである。

2 ワタシ

ワタシが出現するのは、小野小町姉(790 || 例13)、閑院の五のみこ(857 || 例14)、藤原因香朝臣(736・738 || 例15・16)、藤原兵衛(789 || 例17)、小野小町(938 || 例18)、閑院(837 || 19)、伊勢(後述)の7名である。前二者はワタシだけの使用だが、他はワシなどと併用する。

例13 あひしれりける人のやうやくかれかたになりけるあひだにやけたるちの葉に文をさしてつかはせりける

こまちがあね

790 時過てかれゆくをの、淺茅には今は思ひぞたえずもえける

○秋モ過テ冬ガレニナツタ野ハ 火ヲツケテヤイテモエル物ヂヤガ テウド其通りデ年ガイテオマヘノ御心ノカレ／＼ニナツタワタシハ 今デハモウ ジヤウヂウム子ノ思ヒガサモエマスワイナ ソレデ此淺茅モ此通りニヤケマシタ ゴラウジテ下サリマセ

例14 式部卿ノみこ閑院の五のみこにすみわたりけるを(ノモトヘタエズカヨヒ) いくばくもあらで女みこ(五ノミコ)のみまかりにける時にかのみこのすみける帳のかたびらのひもにふみをゆひつたりけるをとりて見ればむかしの手(五ノミコノ)にて此哥をなむかきつたりける

857 かず／＼に我をわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ

○御深切ニ思召テワタシガコトヲ御忘レ下サレヌモノナラバ山ヘタチマス霞ヲ アハレトハ思召テゴラウ

例 15 ジテ下サリマセ 山ノ霞ガ ワタシガ煙ニナリマシタ跡ノユカリデゴザリマスルホドニ
右のおほいまうち君すまずなりにければ(モウカヨハヌヤウニナツタレバ)かのむかしおこせたりける文
どもをとりあつめてかへすとてよみておくりける 典侍藤原ノよるかの朝臣

736 たのめしこし言の葉今はかへしてむ我身ふるればおきどころなし

○コレマデイロくト末頼モシサウニオツシヤツテ下サレタ御文ドモ、モウ(いまは)御モドシ申シマ
セウゾワタシガ身ガ此ヤウニアカレテシマウタレバ 今デハモウ此ヤウナ御文ナドハ 此方ニハオキド
コロガゴザリマセヌ

例 16 題しらす よるかの朝臣

738 玉ぼこの道はつねにもまどはなむ人をとふとも我かと思はむ

○オマヘハ今デハ 毎夜御通ヒナサル所ガ外ニアルヂヤガ タマタマ今夜コレへ御出下サレタハ 定メテ
道ヲトリチガヘナサツタデアラウヂヤケレドモ 此ウヘトテモ イツデモコヨヒノヤウニドウゾ道ヲト
リチガヘテ御出下サレバヨゴザリマス ソシタラ餘ノ人ノ所へ御出ナサルノデモ實ニワタシガ所へ御出
下サ レタノカト思ヒマセウワサテ

例 17 こ、ちそこなへりけるころ(ビヤウキノジセツ)あひしりて侍ける人のとはでこちおこたりて後(ク
ワイキシテカラ)とふらへりければよみてつかはしける 兵衛

789 しでの山ふもとを見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

○サキダツテハワタシモワヅラヒマシテスデニ死マズデアツタガツレナイオマヘヨリ先キヘ ワシハシデ
ノ山ハコエマイゾト存ジテ ソノ麓マデ參ツテ見テサモドツテ參リマシタ

例 18 ふんやのやすひでがみかはのぞうになりてあがた見にはえいでた、じやといひやれりけるかへりことによ
める打聞あがたの説わるし 小野小町

938 わびぬれば身をうき草の根を絶てさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

○ワタシハモウツイツライ身(身をうき)デ 難義ヲ致シテヲリマスレバ 浮草ノ根ガナウテ ドチヘデ
モ水ノユク方ヘサソハレテユクヤウニ誰デモサソウテケレル人ガアラウナラ ドツチヘナリトモ參ラウ
トサ存ジマスル

例19 藤原ノたゞふさが昔あひしりて侍ける人のみまかりにける時にとふらひに遣すとてよめる 閑院

837 さきだ、ぬくいのやちたびかなしきは流る、水のかへりこぬなり

○人ノ死ヌルハ テウド流レテユク川ノ水ノトホリデ ニタビ返ツテクルト云コトハナイ 此度ノ御事サ
ゾヤ御力ヲ落シ御申推量シマシタ ワタシモ御同前ニ力ヲ落シマシタ サキヘ早ウ死ニマシタラヨカツ
タニ カウシテ生テヲリマスノガ悔シウテ クリカヘシ／＼カナシイハ 此度ノ御事デゴザリマス サ
キヘ死ニマシタナラ コンナ事ハウケタマルマイモノ

例13 (790)の小野小町姉の歌は、次第に疎遠になっていた相手に、焼けた茅の葉に手紙を挿して小野の浅茅に燃える火と自分の心に燃える恋の情火とを掛けて詠んだものである。相手は「あひしれりける人」とあるだけで、身分等は不明であるが、俗語訳では「オマヘノ御心」「ゴラウジテ下サリマセ」と敬語を使用している。「ゴラウジテ下サリマセ」は、俗語訳ではこの他に例14(857)の閑院の五のみこの俗語訳に出現するだけで、『遠鏡』には合計2回を数えるだけでしかない。これを小野小町姉の相手に用いている点から考えると、宣長はその人物に相当敬意を表していることが推測される。

例14 (857)の歌は詞書に、夫である式部卿敦慶親王が、閑院の第五内親王が生前書き残したものを、内親王の死後見つけたものである、とあるように、作者名は記してないが、作者は閑院の五のみこであることがわかる。内親王の自称として、「ワタシガコト」、「ワタシガ煙ニナリマシタ跡」とワタシが使われている。

例15 (736)と例16 (738)は、ともに藤原因香の歌である。因香は「典侍。略。寛平九叙従四下掌侍」「女も四品しつれば朝臣と書」(竹岡・上404・405頁)とあり、朝臣と称する女性歌人である。例15

(736) は詞書にあるように、右大臣(源能有)が自分の家に住まなくなったので、今までの手紙を取り集めて相手に返却する際に詠んで送った歌で、「我が身ふるれば」を「ワタシガ身ガ此ヤウニアカレテシマウタレバ」と俗訳している。また例16(738)の歌について、竹岡は「玉ほこの道は、せめていつでも取りまぢがえてくれよ。たとい他人を訪問するとしても、(それは)私(に逢いに来たの)かと思おう」と訳し、「やはり、嫌味を言っているようでありながら、女の媚態である」(竹岡・下428頁)と評している。宣長の俗語訳では「我かと思はむ」を「實ニワタシガ所へ御出下サレタノカト思ヒマセウワサテ」となっている。この二首の内容を見ると、ともに疎遠になった相手に対する女の意地や媚態が感じられるが、同時にまた二首とも相手に対し敬語を多用している点も注意される。736では「末頼モシサウニオツシヤツテ下サレタ御文下モ」「モウ御モドシ申シマセウゾ」、738では「御通ヒナサル」「御出下サレタ」「道ヲトリチガヘナサツタ」「御出ナサル」などがある。右大臣に対する敬語は当然としても、738の相手も、敬語の多用から判断して、宣長は相当身分ある人物と見なしていたようである。

因香の歌は、ワタシの外に、ワシが出現するのが一首ある。それは80(春歌下)の歌で、これは病気のため部屋に閉じこもっている間に、咲くのを待っていた桜もすっかり散りがたになってしまったと、春の移りゆく有り様を詠んだものである。ワシは「ワシハアンバイガワルウテ帳(ネドコロ)ノ帷(カタビラ)ヲオロシテ」と使われている。因香では、相手の存在しない季節の移ろいを詠う歌にはワシを、敬意を表すべき元恋人に対してはワタシと、訳し分けることが確認される。

例17(789)の藤原兵衛の歌は、瀕死の重病を煩っている時には見舞いにも来てくれないで、病気が快方に向かってから見舞いに来るような薄情な恋人に対して詠んだものであるが、ここにはワシとワタシが共存している。同一和歌内に共存するということは、ワシとワタシの待遇価値に差違がないと言ふことなのか、それとも微妙に訳し分けた結果なのであろうか。細部にわたって検討すれば、ワタシは傍線部分に「サキダツテハワタシモワヅライマシテ」と出現する。この部分は相手への非難と皮肉の気持ちを讀みとらせることを意図して、原歌に

ない言葉で補足説明していると解せるところである。一方ワシは、原歌を踏まえ「ワシハシデノ山ハコエマイゾト存ジテ」と、自分の強い意志を表明している部分である。このように文脈上から、両者の差異を考慮することができるが、果たして宣長のワシとワシの意味、機能に対する認識の違いはどのようなものであったのであろうか。なお兵衛の歌は二首採録されているが、「物名」の455の方には一人称代名詞は出現しない。

例18(938)の小野小町の歌に關しては、宣長は『玉勝間』の「小野小町の考」でその歌を取り上げ、作者の年齢について、文屋康秀の年齢を「(六十餘歳よりは)十餘年ばかり以前、貞觀のはじめの比と見て、小町三七八歳ばかりとおしはかれば」と推定している。この両者の年齢から見ると、恋心よりむしろ「内輪を知り合つてゐる者同志の、いたはりに対しての甘え心の、誇張を伴つてゐるもの」(『窪田評釈』の引用、竹岡・下795)という解釈も出てくるが、竹岡正夫も、種を明かせば『窪田評釈』などが説明している実状である、と述べている。このワタシの歌に対し、ワシの方は、「春歌下」の113、「恋歌」の557、623、727、782、822の六首に出現する。俗語訳の部分を中心にあげると、

113 花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

ワシハツレソフテ居ル男ニツイテ心苦ナ事ガアツテ

557 おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあはずたきつせなれば

(この歌は、安倍清行朝臣の歌(556)への「かへし」である)

ワシガ涙ハ又々ソソナコツチャナイ ドウモセキトメラレヌホド流レテ

623 みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる

アノ御人ハ ワシガ身ヲ ドウモ逢レヌ身ヂャトハ 知ラシヤラヌカシテ

727 あまのすむ里のしるべにあらなくにうらみむとのみ人のいふらむ

ワシハソソナ浦ノ案内者デモナイニ ドウ云コトデ ウラミヲ云ハウ

782 今はとて我身時雨にふりぬればことのはさへにうつるひにけり

ワシガフルウナツタレバ、モウイヤト思召テ マヘカタオツシャツタ御約束ノ御詞マデガ
 822 秋かぜにあふたのみこそかなしけれわがみむなしくなりぬと思へば

百姓ノ頼ミニシテ居ル田ガ サツハリシマヒニナル ワシガ中モテウドソンナ物デ

以上のようなのである。ここには、ワシハ、ワシガなど係助詞、格助詞のついたもの、「ワシガ涙」など連体詞的用法のものがある。これらの歌の内容を見る限り、ワタシとワシとの訳し分けの基準があまり判然とはしないが、ただ両者の違いとして、一つは部立の相違、一つは詞書の有無が確認される。部立の相違とは、ワシが出現するのは、「春歌」「恋歌」で、ワタシは「雑歌下・巻第十八」という点である。巻第十八は老齢や無常を嘆く歌が中心に配されているところである。また詞書の有無というのは、詞書が存在するのは938だけで、文屋康秀からの誘いに対する返事であることを明記してある。以上の相違と、宣長が『玉勝間』で康秀の年齢を推定してそこから小町の年齢を推し量っている点を考慮すれば、小町に出現するワタシは、年齢的に若くない女性の自称としての意味が強いのではないかと思う。

最後に例19(837・哀傷歌)の閑院であるが、これは藤原忠房が「昔あひしりて侍ける人」の死を悲しんでいるのに際し慰めのために詠んだもので、「一人の死を契機にして、二人が全く同じ悲しみにあるという証を、この諺(筆者注、後悔不立前、流水不還源)の共通理解によって示している歌である。——略——作者が一所懸命に慰めてあげようとしている真情もうかがえる。」(竹岡・下586頁)と評される。閑院の歌は二首採録されており、740(恋歌)の方にはワシが出現する。この歌の詞書には「中納言源ノのぼるの朝臣のおふみのすけに侍ける時よみてやれりける」とあり、すでに相手が心まで離れ去っているのを恨んで詠んだ歌であるが、「ワシガ身モ相坂ノ関ニハナシテアル」「ワシハサウシテ御往來ナサルノヲ見ルコトサヘ」と、ワシガ身、ワシと、ワシを用いている。

3 伊勢の例(ワシ・ワシヤ・ワタシ・ワタクシ)

伊勢に出現する一人称代名詞を整理すると、次のようになる。

ワシヤ

恋歌 676 || 例20、681 || 例21

ワシ／ワシガ

恋歌 733 || 例22、741 || 例23、756 || 例24、791 || 例25、810 || 例26

雑歌下 968 || 例27

雑体(誹諧歌) 1051 || 例28

ワタシ

恋歌 780 || 例29

ワタクシ

雑歌下 968 || 例30

例20

伊勢

676 しるといへば枕だにせでねし物をちりならぬ名の空に立らむ

○ナンボカクス戀デモ 枕ハヨウ知ルト云コトヂヤニヨツテ ワシヤ枕サヘセズニ寐タモノヲ 誰レガマ

ア知テ ウキ名ガバツト高ウ立ツタコトヂヤヤラ 塵コソ空ヘバツトタツ物ナレ 塵デモナイウキ名ガ

サマア

例21

伊勢

681 夢にだに見ゆとは見えじ朝な／＼わが面影にはづる身なれば

○ワシヤモウ思フ人ノ夢ニモ見エルトハ見ラレマイゾ 朝々鏡ヲ見ルニモ キツウヤツレタオモカゲデ

ハヅカシイ身ヂヤニヨツテサ

例22

伊勢

733 わたつみとあれにしとを今さらにはらはゞ袖や沫とうきなむ

例 23

○ワシガ床ハ 久シウウチタエテ思フ人ト逢テ寐タコトモナイユエ カナシサニ涙ハ海ノヤウデ ソノ海ノアレルヤウニアレテシマウタ床ヂヤニ久シブリデ又今サラ其人ニ逢ウヂヤトテ ソノ床ノツモツタ塵ヲ袖デハラウタナラ 海ヘ沫ノウクヤウニ ワシガ袖ガ涙ニウクデカナアラウ

伊勢

題しらず

741 故郷にあらぬものからわがために人の心のあれて見ゆらむ

例 24

○故郷コソアレテ見エル物ナレ ワシガ思フ人ノ心ハ故郷デハナケレドモ ワシガタメニ此ヤウニアレテウトくシウナツタハドウ云コトヤラ

いせ

756 あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬる、がほなる

○此ヤウニ物思ヒヲシテ涙デ袖ノヌレテアル時節ヂヤトテ 此袖ヘウツ、夕月ノカホマデガ ワシガ顔ト同シヤウニ ヨウソウロテヌレテ見エルコトワイノ

例 25

ものおもひけるころ物へまかりける道に野火(野ヲヤク火)のもえけるを見てよめる

いせ

791 冬枯の野べとわが身を思ひせばもえても春をまたまし物を

○人ニ見ステラレタワシガ身モ 冬枯ノアノ野ヂヤト思フナラ アアシテ焼ヤウニ 今コソ思ヒガモエルケレドモ ソレデモ又春ニナツタナラ 芽ガデルデアラウト思フテ 春ヲ待タウモノヲ ワシハモウアノ冬枯ノ野トハチガウテ 春ニナツタテモ芽ノデル頼ミモナイ身ヂヤワイノ 従女シウモス井リヤウシテタモイノ

例 26

題しらず

伊勢

810 人しれずたえなましかばわびつ、もなき名ぞとだにいはまし物を

○シウ世間ヘシレズニ絶タ中デアラウナラ 絶ルハツライコトナガラモ 無イ事ヂヤト云テ セメテハウキ名ノタ、ヌヤウニナリトモセウモノヲ ワシガ中ハハヤ世間ノ人モ知テ居レバ 無イ事ヂヤトモイ

例 27 八レ子バ 絶タバカリカウキ名サへ立ツテ サテモサテモメイワクナツライコトカナ
家をうりてよめる 伊勢

990 飛鳥川ふちにもあらぬわがやともせにかはりゆく物にぞ有ける

○アスカ川ノ淵コソ瀬ニカハル物ヂヤト聞及ンデ居レ ソノ飛鳥川ノ淵デモナイワシガ家モ 不仕合セナ
時節ニナレバ 瀬ニカハツテユク物ヂヤワイ 瀬ニト云ノハ ソレアノオアシノコトサ ガテンカエ

例 28 伊勢

1051 難波なるながらのはしもつくるなり今は我身をなに、たとへむ

○今マデハ何ンデモフルウナツテシマウタ物ヲバ 難波ノ長柄ノ橋ニタトヘタヂヤガ ソノ長柄ノ橋モ今
度新シウ出来タヂヤ スレヤ此ヤウ二人ニアカレテ奮イ物ニナツテシマウタワシガ身ヲバ モウ今デハ
何ニタトエウゾ ナンニモ譬ヘル物モナイ

例 29 なかひらの朝臣あひしりて侍けるを かねかたになりにければち、がやまとのかみに侍けるもとへまかる

とて よみてつかはしける 伊勢

780 みわの山いかにまちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじとおもへば

○ワタシモモウ京ニ居テモオモシロウナイニヨツテ 此度大和へ下リマスルガ 三輪ノ山本トムライキマ
セト古哥ニヨンデアルヤウニ 今カラアノ方デ戀シイ人ヲ待ツタトテモ 何ン年タツトモ タレモ尋子
テ來テクレル人モアルマイト存ジマスレバ ドウシテマア待チヲ、セテ逢ハレマセウゾイノ

例 30 かつらに侍ける時に七條ノ中宮とはせ給へりける御返り事にたてまつりける 伊勢

968 ひさかたの中におひたる里なればひかりをのみぞ頼むべらなる

○此ノ里八月ノ中ニハエテアルト申シマスル桂ノ里デゴザリマスレバ ヒタスラアナタ様ノ光リヲサ 頼
ミニハ致シマセウト存ジマスルワタクシハ 后をば、月にたとへ奉ること也、

まず、ワシヤが出現する例20(676)、例21(681)であるが、676は枕にさえ知られないよう氣遣つて隠していた筈の二人の中について浮き名が立ったのはどうしてかという氣持ち、681は激しく恋し続けていると、思う人の夢の中に寝ぼけた姿のまま現れてしまいそうだ、そんなことは恥ずかしくてとても堪えられないという心理を詠んだもので、いずれも激しい恋に揺れる女心を詠ったものである。

それに対しワシが出現する「恋歌」は、例22(733)から例26(810)までの五首であるが、いずれもすでに恋人との仲が絶えた女性の心理を詠んでおり、このうち例26(810)を除く四首は比喩を巧みに用いてつらい現実を嘆く内容となっている。たとえば自分の床を久しく恋人と逢えないため荒れ果てた海のようにたとえ(例22||733)、思う人の心を荒れて見える故郷に見立て(例23||741)、月の「ぬるるかほ」で自分の涙に濡れた顔を暗示し(例24||756)、そして冬枯れの野に我が身を思ひなす(例25||791)などである。

同じ「恋歌」を中心にワシヤとワシの訳し分けを見ると、前者は恋に身を焼く女心を詠った歌に、後者はすでに恋人との仲が絶えてしまったことを嘆く歌に出現する傾向を示している。

それらに対し、「雑歌」や「雑体」に出現するのは、いずれも「ワシガ家、ワシガ身」と連体詞的用法のものである。しかも表現を見ると、例27(990)では、宣長は「せに」を「瀬に」と「銭」の意を掛けていると解し、「瀬ニト云ノハ ソレアノオアシノコトサ ガテンカエ」とわざわざ断っているが、この説明部分はかなり碎けた印象を与える表現である。また例28(1051)の俗語訳には、「スレヤ此ヤウニ」と、「ことにうちとけたること」の例の一つとして挙げるスレヤが出現している点から見ると、やはり碎けた印象を与えるものとなっている。

例29(780)にはワタシが、例30(968)にはワタクシが出現する。例29(780)の相手は藤原忠平で、この人物については「関白基経の子で、伊勢の仕えた宇多帝の皇后温子の弟。略—左大臣にまでなり。世に枇杷殿と称した」(竹岡・下494)とある。また例30(968)は、伊勢の仕えた七条の中宮温子に対する返事として詠んだ歌である。伊勢では、主人である中宮の弟で、関白の子に対してはワタシを、主人の中宮に対し

てはワタクシと、相手との関係によって訳し分けていることが確認される。

4 女性歌人のまとめ

以上、女性歌人に見るワシヤ、ワシ、ワタシ、ワタクシについて検討した結果、次の点が明らかとなった。ワシは、一般に「恋歌」などで女性の自称として広く使われており、男性の場合と同様、「はぶきてつねに」言う人称代名詞であると見なすことができる。それに対し、ワシヤは女性専用語であり、「くそ」のような誹諧歌とか、寵のような恋人との別れを決意表明している歌とか、伊勢のような激しい恋心を詠う歌などに出現する。ワタシは、小野小町のような中年の女性の自称として、兵衛のような薄情な恋人に対し非難、皮肉を込めていると解するところに出現することもあるが、多くは恋人である相手が敬意表現を使うような人物である場合に出現する傾向がある。その中には哀傷歌も含まれている。ワタクシは伊勢が主人である中宮に詠んだ歌にのみ出現する。このように、歌人名の明らかな和歌を手がかりにすると、作者の身分（閑院の五のみこ）、年齢（小町）、敬意を表すべき相手との関係（因香、伊勢、小町姉）、和歌の内容（哀傷Ⅱ閑院、閑院の五のみこ、誹諧Ⅱくそ）、作者の激しい心情（寵、伊勢）などを条件として訳し分けたのではないかと推測される。なお男性より女性の方が人称代名詞の使用法は複雑であることがわかる。

六 まとめ

『遠鏡』の俗語訳に現れた一人称代名詞を取り上げ、その種類、頻度、出現範囲を検討した。そしてワシヤ、ワシ、ワタシ、ワタクシの四種類の語に絞り、その訳し分けの実態と待遇表現価値を考察してきた。

歌人名が明らかな歌においては、最も一般的には性差に関わらずワシを当て、ワシヤ・ワタシ・ワタクシ・私は特殊な条件下での使用に限定されていることが判明した。ワシヤは男性の自称としては1回も現れず、専ら女

性語として機能している。特におどけた感じの歌、あるいは恋人との別れを決意する歌や恋愛中の女性の激しい心情を表出する歌に現れる傾向がある。

ワタシは、「表2」に示すように、男性より女性の方に多く出現するが、そればかりでなく、男性の場合も五回中2回は女性に仮託した歌に出現するため、女性語的性格を強く打ち出すものとなっている。尤もそうは言っても、女性の場合もかなり特殊な条件下で使われており、ワシほど一般的ではない。例えば恋の相手は中宮の弟などの敬意を表すべき人物とか、あるいは薄情な相手に対して非難、皮肉をこめて表現する文脈とか、年齢的に齢を重ねた女性とか、又は哀傷歌などの改まった場面とかである。これは男性の場合も同様で、相手の女性が身分ある人物とか、罷免の知らせを天上の人の訪れと諭えるとか、仁明天皇の御子の立場にあるとか、相手との対人関係、特殊な比喩、御子という身分など、特殊な場合に出現しているのである。

ワタクシは男女とも後の御前での使用に限定されている。「私」は男性専用で、文屋康秀が二条後の前で詠んだ歌に限定され（ただし「無記」の場合は「よみ人しらず」の哀傷歌にも出現する）ており、これもまた特殊な状況となっている。

以上の結果から待遇価値を判断すれば、ワタクシ（私）は、男女とも最高の敬意段階にあり、次いでワタシがそれに続くとみてよいであろう。ワタシは女性語的性格の強い一人称代名詞であり、男性も使うことはあるが、いずれも特殊な条件下での使用に限られているといえる。ワシは特に「恋歌」に集中し、そこでの男女の自称として広く一般に使われており、『遠鏡』では最も普通の敬語表現と見なせる。ワシヤは女性専用語と言えるもので、おどけの感じ、あるいは女性の心情を強く打ち出す場面などに出現するため、ごく軽い敬意を表す、またくだけた印象を与える一人称代名詞といえよう。

ところで、ここで取り上げたワシヤ、ワシ、ワタシ、ワタクシは、江戸期の口語の中でどのような位置を占めているのであろうか。

先述した田中章夫（1973）によると、近世前期上方語では、ワタクシ、ワタシ（男）が1「最も敬意の高

い」表現、ワタシ(女)が2「普通の敬語表現」、ワシは3「ごく軽い敬意」の表現に分類されている。参考までに江戸語(文化・文政期の江戸ことば)の方を見ると、ワタクシは1、ワタシは2、ワシは3に分類されている。『遠鏡』ではワシが田中章夫の2「普通の敬語表現」に相当し、ワタシはワタクシに次ぐ人称代名詞で女性語の性格をもち、1「最も敬意の高い」表現に近いと見なせるため、この田中章夫の分類とは合わないところがある。

また湯澤幸吉郎は、江戸前期・上方語で、ワシは「大名の姫・武家の女・遊里の女など、主として女の用いる語であるが、又男も用いることがある」(38頁)と述べ、階層差に関わらず使用する女性語とみている。またワタクシ、ワタクシは「ともに女が多く用いるが、男も改まった場合には用いる」(39頁)と述べ、ワタクシは「商家の娘」、ワタクシは「若い女が武士」(「武士の妻が夫に」「武士ノ女お雪が権三」と、前者は商家の娘、後者は武士の妻などを例に挙げている。

山崎久之も、ワシについては「女性の盛んに用いる語で、近松狂言本では男女の使用比は明瞭のもののみで一五八対一五である。―略― 男性語の『わし』は浄瑠璃でも使用例は少ないが、―略― 特殊条件で用いたというものではない」(304頁)と述べ、稀に男性も普通に使用することがあったらしいが、やはり女性語としての性格の強いものであったと見なしている。それに対し、「わたくし(私)」は『お前』段階の対称に対して用い、男女とも武士、町人の区別なく使用する」(300頁)、「わたし」は「女性では町人階級(武士の用例もある)に多く使用しているが、男性は武士は用いなかった。女性は『こな様』段階の対称に対して用い、男性は『お前』段階の対称に対して用いる」(302頁)と説明がある。

次に、江戸後期・江戸語の方を見ると、湯澤幸吉郎は、ワシについては特に説明せず、「その他」に「てまえ、こっち(ら)」などととも例を挙げるだけである。例には「おらが大家どのが」と話す店子の男性の言葉として「わしが地口を云ました」(近文)、「余」にワシとルビを振る例(出定)、「わしもおのしが琴をきいて」(娘節用)と、三例が挙げられているが、店子の男性の言葉などから判断すると、江戸語ではもはや女性語として機能せ

ず、特殊な条件下で使用する男性語的性格が強くなっているようである。またワタクシ、ワタシは、自称の人名詞の筆頭に挙げ、「わたくし、わたし」は「現在と同じく、前者は最も丁寧な改まった場合の語であり、後者はややくだだけた場合の語である」(85頁)と説明する。

これに対し、江戸後期・上方語では、山崎久之は、男性語の「化政期対応表」と女性語の「庶民語対応表」(化政期)の中で、ワシは第二段階(敬語)から第四段階、つまり「敬語の段階」から待遇価値が下降した「平常語だけの表現段階」までの間に挙げており、ワタクシは第一段階(大敬語)、ワタシは第一、二段階に、それぞれ挙げている。ただし、女性語は、資料の乏しさから、どこまで当時の実態を反映しているかわからないと断っている。

以上のような使用状況を見ると、俗語訳に出現するワシは、前・後期上方語の使用状況に通じるが、後期江戸語には通じない。ワタシとワタクシは、前・後期上方語と後期江戸語に通じるものがある。今後、使用状況や敬意の段階などに関し、今回取り上げなかった人称代名詞もを加えてさらに詳しく分析し、『遠鏡』の人称代名詞の実態と江戸期における口語の性格を確認したいと考える。(敬称略)

(注)

- 注1 岩田隆(1988)『宣長学論攷―本居宣長とその周辺』桜楓社 88頁
 注2 注1 93頁
 注3 竹岡正夫(1976)『古今和歌集全評釈 上』右文書院 1、2頁
 注4 注1 81頁
 注5 注1 82頁
 注6 中村幸彦(1971・12)「近世語彙の資料について」『国語学』87 73頁
 注7 注6 75頁
 注8 注6 77頁
 注9 林巨樹他(1980・3)「江戸中期の国語について―古今集遠鏡訳文の助動詞研究」

- 注10 『青山語文』第十号 青山学院大学日本文学会 143頁
塩澤和子(1993・3)『古今集遠鏡』における敬讓の助動詞―(サ)セラルル・(ラ)ルル・(サツ)シャル
の使用差をめぐって』『文藝言語研究・言語篇』23筑波大学 文芸・言語学系紀要
『増補 本居宣長全集 第七』 238頁
- 注11 注11 240頁
- 注12 永野賢(1975・1)「本居宣長『古今集遠鏡』における「てにをは」の俗語訳の原則とその適用の実態」『東京
学芸大学紀要 第2部門 人文科学』第26集
- 注13 湯澤幸吉郎(1970)『徳川時代言語の研究』(風間書房、同(1981)『江戸言葉の研究』(明治書院、辻村
敏樹(1971)『敬語の史的研究』(東京堂、田中章夫(1973)『近世敬語の概観』(『敬語講座4 近世の敬
語』(明治書院)、山崎久之(1963)『国語待遇表現体系の研究 近世編』(武蔵野書院)などを参考にした。
- 注14 田中章夫(1973)『近世敬語の概観』『敬語講座4 近世の敬語』明治書院
- 注15 時枝誠記(1974)『日本文法 口語篇』岩波書店 73頁
- 注16 注3からの引用であることを示す。上は上巻、下は下巻の意。数字は頁を表す。
- 注17